地域デザインによる繋がりが減った地域を結びつける試み

~元気っ子スポレクフェス報告~

元気っ子スポレクフェス団体代表　樽川　凜

要旨

地域デザインは、住民がつながりを持ち、全世代が参加できるコミュニティを目指します。健康で文化的な生活を提供し、人間関係を通じて幸福感を高めることが大切です。大学や企業との協力も不可欠と考えています。

私は新型コロナの影響で社会的距離が広がり、地域のつながりが希薄になったことに気付きました。そのため、他者とのつながりを求め、ボランティア活動に参加しました。その経験から地域デザインに興味を持ち、社会情報デザイン学科で学ぶことになりました。

現代の地域の課題は、インターネットの普及により浅いつながりが増え、本来重要な地域のつながりが薄れていると感じています。その解決策として、地域コミュニティに遊びを取り入れ、自由に遊べて誰とでも仲間になれる場所を提供することを提案します。これが私たちの元気っ子スポレクフェスの立ち上げのきっかけでした。

スポーツレクリエーションを通じて地域と人々のつながりを強化する活動を始めた頃は、多くの苦労がありましたが、構成員や協力機関の支援を得て成功裡に多くの参加者を迎え、地域と人のつながりを深めました。参加者たちの健康促進や地域への貢献、構成員の成長にも繋がったと考えています。

活動実施後、多くの学びがあり、リーダシップの重要性やコミュニティの拡大が課題となりました。今後も地域コミュニティでの拡大と居場所づくりに注力し、地域の過疎感を解消していく必要があります。

1.私たちが考える地域デザインとはなにか

私たちの地域デザインは、住民がつながりを持ち、全世代が社会に参加できる地域を目指します。健康で文化的な生活を提供し、人とのつながりで幸福感を増進させる社会を作りたいと思います。また、大学や企業との連携も重要で、これによりまちづくり活動が促進され、市の活性化に繋がるでしょう。地域デザインは学生が地域と連携してプロジェクトを企画・立案・運営する経験として、良いものになると考えます。

2.なぜ地域デザインに興味を持ち、研究に至ったのか

新型コロナウイルスの流行で社会的活動が約 2 年間制限され、私は家族や親友など限られたコミュニティでの生活が主となりました。この期間中、社会的孤立感を感じ、コロナ明けには地域の人とのかかわりを築きたいと考えました。

コロナ明けに積極的に地域ボランティアに参加し、不登校小中高生や居場所のない人たちに向けた慈善活動に参加しました。この経験から、地域をより良くする方法に興味を持ち、現在は社会情報デザイン学科で学んでいます。

3.現代における地域のつながりの過疎感とその解決案

現代では人とのつながりが減少していると感じます。子供の頃は近所に住むだけで仲間意識があり、気軽に遊びに誘えたが、今はインターネットが主流で SNS でのつながりが増え、プライベートでの交流が少なくなりました。同時に、地域への興味も薄れ、限られたコミュニティでの生活が増え、地域のつながりが薄れているように感じます。

解決策として、地域コミュニティに遊びを取り入れて、子供も大人も自由に遊べる場所を作ることを提案します。現在、公園でのボール遊びやスケートボードが禁止され、自由な遊び場が減っていると感じます。地域全体で自由に遊べる場所をつくり、自由な環境で遊べるような取り組みを検討してみるべきだと思います。

4.なぜ元気っ子スポレクフェスを立ち上げようと考えたのか

元気っ子スポレクフェスは、私のボランティア経験から着想を得ました。このボランティアでは、小中高校生向けのスポーツレクリエーションを通じて、心身の健康を促進し、仲間意識を育む場となっていました。

昭和の広場のような場所で、何をしていても居るだけで良いという自由な雰囲気が、自由な過ごし方や仲間の大切さを教えてくれました。これは、将来の居場所づくりにおいて非常に重要な考え方であると感じ、大学の敷地に自由に運動できるスペースを作り、仲間との楽しい時間を共有できる場所をつくりたいと思いました。同時に、人と人を繋げる取り組みも重要視しました。

孤立している子や初めて来た人たちに積極的に声をかけ、一緒に遊ぶように誘う取り組みを行うことで、誰もが楽しめる空間を提供したいと考えました。

5.元気っ子スポレクフェスによって期待できる成果は何か

元気っ子スポレクフェスのスポーツレクリエーションは、広い年齢層が楽しめ、人とのつ

ながりを感じられるイベントを多く用意しました。参加者には充実した運動を通じて幸せな気分を味わってもらい、健康の維持に寄与することを目指しました。地域と十文字学園女子大学のつながりを重視し、地域同士や学生と地域との交流を促進しました。

この活動を通じて、参加者は運動を通した新しい経験を得ることで、健康の向上につながる可能性がありました。また、構成員やボランティア員には、地域に貢献できる資質や社会進歩への気概を養う機会となりました。

6.元気っ子スポレクフェスを実施しようとした上での過程と苦難

この活動では、企画書や計画書の作成、日程の詳細な調整、各月の会議と進捗報告、協力先への挨拶回り、フェスの開催に関する相談や検討、広報と研修などが行われました。準備段階では時間に追われ、構成員全員が忙しい日々が続きました。スケジュール管理やプレゼン能力が試され、リーダシップも問われました。私も何度か力不足で構成員に迷惑をかけ、団体運営の難しさを痛感しました。また、当日の運営では多くの運動量で一部構成員が体調を崩す事態もありました。

7.元気っ子スポレクフェスを実施しての成果と感想

皆の協力と協力支援先のおかげで、元気っ子スポレクフェスは桐華祭２日間で２４６人ものお客さんを迎え、大成功となりました。多くの参加者から「久しぶりに運動した。」「とても楽しかった。来年もやってほしい」との言葉をいただきました。構成員も喜ぶ様子が多く、私もフェスの成功に満足しています。

8.この活動をして今後の課題はなにか、そして私たちの夢に繋げるにはどうするか

この活動を通じて多くの学びがあり、特にリーダーシップにおいて課題が残っていることを感じました。今回の活動は大学内の学園祭で行われましたが、同様の取り組みの規模を大きくして地域に拡げ、地域主体のイベントにも展開できる可能性を感じました。これによって地域の過疎感を解消し、地域コミュニティを拡大して居場所づくりに貢献したいと考えています。私たちは社会情報デザイン学科として、地域に良い影響を与えるデザインを試行し、誰が何を必要としているかを常に考える力が必要だと感じています。

スポーツを通して、地域をつなげる活動に実際に参加して実地研修を行う

チラシ配布や呼び込み活動をフェス開催当日まで行った

多くの参加者を迎えることができ、その数はおよそ 246 名となった

多くのお客さんより、「久しぶりにこんなに運動した。」や「とても楽しかった。また来年もやってほしい」などの言葉をいただいた